

昭和 20~30 年代

下馬兵舎時代の 思い出の景色

BOOK'24

下馬兵舎時代の思い出の景色

世田谷パブリックシアター
SETAGAYA PUBLIC THEATRE



お話に登場する主な建物の位置を昭和22年・米軍撮影の空中写真に記載（出典：国土地理院ウェブサイト）

団地になる前の下馬の景色をたずねる

列をなして並ぶ巨大な木造兵舎、共同の炊事場やトイレ、廊下で煮炊きをする食事時、建物の前での子どもたちの焚き火——下馬地区でのアートプロジェクトを通して出会った方々から伺ったのは、下馬に団地が建てられる前の「兵舎の時代」の生活の景色でした。戦前の三軒茶屋・下馬周辺は多くの軍用施設が置かれた「軍隊のまち」。兵隊が寝泊まりなどにつかっていた大量の兵舎は戦後、空襲で焼け出されたひとや外地から引き揚げてきたひとたちの住まいとしてかわれていたそうです。鉄筋コンクリートの団地に建て替えられていく昭和30年代半ばまでの10数年間、「世田谷郷」と呼ばれた兵舎住宅一帯では、たくさんのひとが共に生活を営んでいました。

現在のまちなみからは想像のできない当時の暮らしや景色を知りたいと思った私たちは、かつて兵舎に住んでいた方々にご協力いただき2021年より聞き取りを開始。暮らしや遊び、まちなみについての思い出話を絵地図のかたちにもとめ、「兵舎の時代」を知り、想像を膨らませ、話をする機会を設けてきました。大きな力で移り変わっていくまちの記憶を「記録」すること、「表現」を通して思い出の中の景色を他者と分かち合おうと試みることに、ふたつを目指して活動を重ねています。

4年目の今年は、ひとびとが暮らした兵舎の「部屋」に注目しました。兵舎に暮らした方々のお話や資料からイメージした「当時の兵舎の部屋」を等身大で団地の広場に再現。加えて、この1年の間に伺った兵舎で暮らした方や当時の下馬を知る様々な方の思い出話をこの冊子にまとめました。生活の基盤である部屋を具体的に描き出そうとする試みを起点に、家とまちなみ、時間と場所を移ろいながらひとりひとりの思い出の景色をたどることができる冊子となっています。

兵舎の時代の思い出といっても、その景色はおひとりずつ異なります。ときには歴史的事実と異なる場合もあるかもしれませんが、ですがその思い出は持ち主の方々の人生の一部で、そこには「思い出の中」ならではの景色があるはず。かつて誰かが暮らしたこの部屋から、このまちから、そんな景色を想像してみませんか？

この冊子について

この冊子には、当時兵舎に暮らしていた方やあの頃の下馬を知る方々、11名から伺ったお話をもとに作成した「**思い出話**」と「**間取りのイメージ図**（兵舎で暮らした方）」を掲載しています。文章と図・イラストをたどることで、様々な視点から兵舎の時代の生活の景色を想像してみることができます。お好きなときにお好きな場所で、ゆっくりとページをめくってみましょう。



会場限定「兵舎の部屋」が出現



部屋の再現イメージ

極楽フェス、24当日は、伺ったお話と資料から推測した寸法で「兵舎の部屋」の大きさを都営下馬アパート内の広場に再現。部屋と「間取りのイメージ図」を重ねてみたり、室内で【やってみよう】をやってみたり、気ままにのんびり過ごしたりすることができます。

【やってみよう】

兵舎の部屋から見えた景色を想像するためのヒント。書かれた動きをやってみることで、そこで暮らした誰かの視線とあなたのがらだを重ねて想像することができます。

【やってみよう】ちゃぶ台の近くに座って天井を見上げたときの明るさを想像してみよう。

紙面の例



- ◎ 今回の冊子には2023年12月以降にお話を伺った方々の思い出話を掲載しています。
- ◎ 掲載の内容は伺ったお話をもとに進行役が作成し、ご本人による確認を経て掲載しています。あくまで「思い出話」であり、おひとりおひとりにとっての事実が異なる場合もあります。
- ◎ 間取りのイメージ図と「兵舎の部屋」の再現は、伺ったお話と資料を参考にその大きさを2間（3.6m）×3間半（6.3m）として作成しています（参考：西山卯三「日本のすまい（巻増補）」（1987）掲載の京都府の事例）。これは具体的に想像する手がかりとして仮定した寸法でおひとりおひとりの部屋の実測の間取りや寸法とは異なる可能性があります。

住まうところの下馬の兵舎

現在の都営下馬アパートとおおよそ同じ範囲に広がっていた外地引揚者定着寮「世田谷郷」には、大小様々な兵舎が建ち並び、それぞれ松寮、竹寮、梅寮、桜寮、菊寮、萩寮などの名前がつけられていた。部屋は基本的に長方形で、入口と窓は各ひとつ。こうした部屋が廊下を挟んだ両側、あるいは片側に多数連なっていた。多くは2階建てだったが、もともと厩^{うまや}として使われていた平屋のものもあった。後に建てられていく平屋の都営住宅も含め、その総人口は数千人に上ったときもあったといわれている。

◎ 各寮の配置は表紙裏の写真やこれまでに作成した絵地図で確認することができます。

怖くて上を見られなかった 松寮1階

松寮の一階、わたしここにいたのよ。ここがわたしの家だったの。生まれてすぐ大田区の叔母のところに預けられていたんだけど、小学校に上がるときにこつちに帰ってきたの。昭和30年くらい、6つのおきだったかな。父と2人の姉と兄とおじいさんの6人で住んでた。

廊下が暗くてね、電気がついてても薄暗いから、お使用に小銭を持たされたりするでしょ、うっかり転ぶと隙間から下に落っこっちゃったりするの。角材を並べたみたいな木の廊

下で、けっこう隙間が空いてた。天井が高くて、それこそ昔の裸電球ですから、薄暗いんです。みんな廊下で煮炊きしてたから、その煤もあるかもしれないね。

部屋の中もね、なにしろ天井まで高かった。色が濃いこげ茶色というか黒っぽくて、暗いの。昼間は窓があるからいいけど、夜は真っ暗。見えなところの方が多かったね。部屋の中に笠のついた電球ひとつだから、上を照らさないでしょ。だから上を見るのが怖かった。誰かからもらったのか買ったのか、電気スタンドが来たことがあって、それがすごい嬉しかったの。

中二階をつくっているおうちもあって「うちもああいうのほしい」って父にいったら「おれはできねえ」って。でもね、それでも今の団地の部屋よりも広がったね。建て替えがあつて団地に入ったとき、きれいで新しくいいところに来たなと思つたけど、慣れてきたら「狭いな」って感じたくらい。

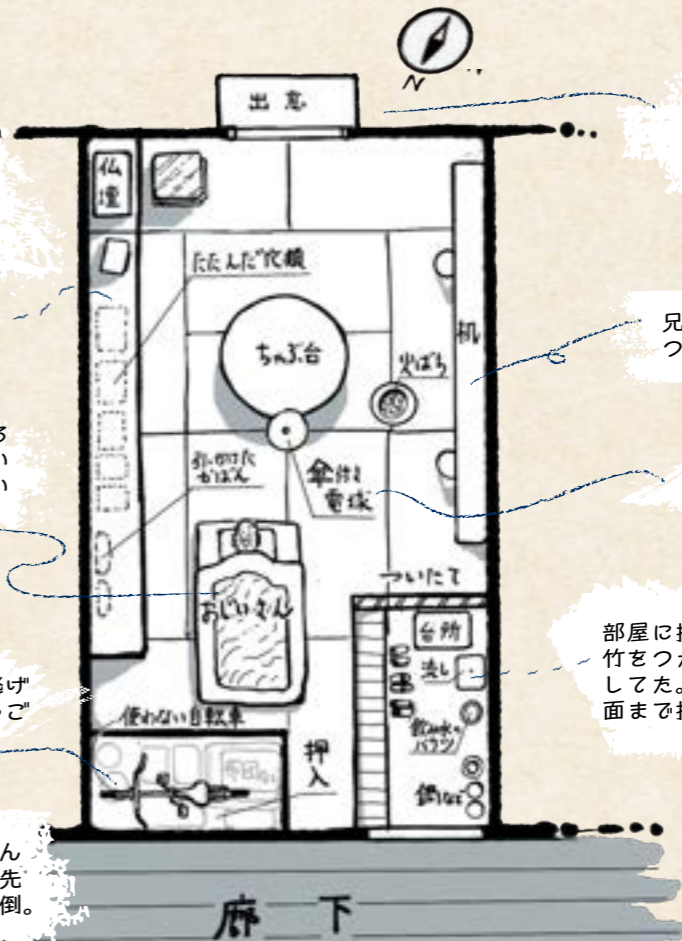
流しは外だね。わたし、炊事場に行くの嫌だつ

兄が窓の外に物干し用の小さな出窓をつくってくれた。ガタガタしてて怖かったな。

兄とふたりでつかった長机。

天井まで3m半はあつたから、電球のひももすごく長かつた。

部屋に排水がないから、竹をつかって床下に流してた。台所の下は地面まで抜けていた。



備え付けの棚が二段伸びて、上の段にラジオや小さな仏壇、下の段には衣類を置いてた。板の下にはかばんなんかをぶらさげてたよ。

小さな縁側みたいなのところを上がったところには、いつもおじいちゃんが寝ていた印象。

兄と喧嘩するときにここに逃げ込む。ひもものがごちゃごちゃあつて怖かつた。

水場は部屋を出て右に進んだ兵舎の外。坂を降りた先にあつたからとても面倒。

た。雨の日なんか特に。松寮を出たところがね、坂っていうか無理矢理につくつた階段みたいになつてたんです。うちは姉が料理をしていたんだけど、ご飯食べ終わってもね、すぐ片付けるのが嫌なわけ。下まで行かないといけないからね。一応石でできた流しは部屋にあつたんだけど、排水がないから、うちは節を抜いた竹を通して床下に流すようになってた。やたら流すとびちゃびちゃになつちゃう。だから、なるべく流さないようにね。

火を起こすのは一番下の子の役目。姉が帰ってきたときに火が起きてないと怒られるの。ほら、あの頃は木のサンダルを履いてたのね、あれもべったんこになるまで履いたら、割って火にくべてた。薪だつたのね。だからわたし、今でも火起こすのうまいよ。新聞紙をまるめて、ぽつとね。

冬場の暖房は火鉢。それしかなかった。ストーブなんてそんな洒落たのなかつたからね。

思い出提供者
セツ子さん(昭和24年生まれ)
兵舎居住年
昭和30年〜36年頃まで松寮で生活

【やってみよう】ちゃぶ台の近くに座って天井を見上げたときの明るさを想像してみよう。



『赤胴鈴之助』が 聞こえてきたら うちに帰ろうって 松寮1階

部屋ん中にはほとんどいなかったんだよ。家の中にいたってつまんねえから。外に行つて誰かと遊んでる方が面白いじゃない。飯食うときは「飯だよー」って、みんなちゃぶ台でさ、適当に食つてたね。だから部屋ん中のごとはあんまり覚えてないんだよね。とにかく寝れる場所があればよかった。中二階があったかどうか俺は記憶にないんだけど、両親とか弟が寝てたのかな。

うちは6人家族。姉さんがいて俺がいて弟がいて、それと妹。戦後この場所はいろんなところから引揚者がやってきて住んでたんだよ。引揚者住宅っ

というのが日本のあちこちにあつて、親戚がいたりするとこの近くに引っつて住んだんだよ。

中学ぐらいかな、今でも覚えてるけど、夕方になるとこの家のラジオから『赤胴鈴之助』の音楽が聞こえてくるんだよ。あの頃はラジオしかないからどのうちも同じようにかけるわけですよ。そしたら「18時だ！ ますい！ 帰ろう」って。時計なんて持ってないし、腕時計なんてもってのほか、外にいたら時間なんてわかんないんだよ。だから日の沈む加減とかでさ。うちにもラジオはあつた気がするけど、あんまり俺は聞かなかつたな。

そうそう、ニワトリ飼つてたんだよ。自分でね。出窓の下にニワトリ小屋をつくつて。友だちがチャボを飼つててさ、いいなあと思つて。それで三宿の交差点をだーっと下つたところにある代議士の先生の家のお手伝いさんに「卵いただけませんか？」って聞いて、分けてもらった。有精卵かどうかもわからなかつたけれど、友だちのチャボに抱かせたら孵つたんだよ。そしたら外国の珍しいのが生まれちゃつてさ。でも世話が大変。八百屋でくず野菜をもらつてきて用意した。あの頃はニワトリの商売人っていうのもいてさ、うちのを高く評価してくれて軍鶏かなんかと交換したのがある。5〜6年飼つてたと思うよ、動物はけっこう好きだったんだよ。

この辺一帯に住んでるひとたちの野球部って

柱時計なんかはあつたんだろうけど、時間なんか気にしなかつたから全然覚えてない。

家族それぞれの着るものを入れた行李こよりが置いてあつた。
(ご家族談)

窓からは、松寮の前に建つていた平屋の都営住宅や井戸が見えてた。

冷蔵庫はないから、食べるものは毎日買いに行つてた。

向かいの家が戸を閉めると風が抜けなくて、夏は暑いなんてもんじゃない。
(ご家族談)

押し入れの上に中二階をつくつていた。かがんで立てるくらい高さがあつたよ。(ご家族談)

うのがあつてさ、あの頃。小学校の高学年ぐらいのときに参加したの。最初は玉拾いからやつてたんだけど、年上とか若い大人たちもいて、そういう先輩たちがすごくかわいがつてくれたんだよ。中学になる頃は松寮の野球チームつてもあつてそこにも入つた。今世田谷公園になつてるところに野球場が4面あつてさ、いろんな地域のチームが練習に来るから、朝5時に起きて場所取りに行くんだよ。メンバーの当番制でね。俺、野球好きだったんだよ。学校から帰つたらすぐ練習に行つてた。そのときの先輩たちは、大人になつてからもずっと関係が続いていったんだよ。

あ、さっきの話だけど、もしかしたら俺も中二階で寝てたかもしれないな。そうだったかも。

【やってみよう】

窓際に座って入口の方を向いたときに見える、中二階にいる家族の姿を想像してみよう。



思い出提供者

昭和20年から33年頃まで松寮に住んだ方
(昭和18年生まれ)

※2023年にインタビューした思い出提供者のご家族のお話も交えて記載しています

同時代の下馬の景色

「ニコイチ」の風景

戦後、続々と増える引揚者に対応するため、寮と寮の間には2軒が連なった平屋の都営住宅（通称ニコイチ）が次々と建てられました。このまちの住まいのモロひとつの風景、ニコイチで暮らした方から伺った思い出のお話。

ちょうどね、わたしが住んでたニコイチの跡地に下馬図書館が建ってるのよ。今、公園になってる辺りに何十軒と並んでた。うちが250番地だったんだから。家を出たところに向かいや斜向かいの4軒とつかう井戸があってね、そこで毎朝家族そろって歯磨きしてた。

ニコイチにはトイレや台所はついてるよ。でも台所はおじいちゃんか途中で増設してくれた。庭がね、家の倍以上あったのよ。バドミントンができるぐらい広かった。ぶどう棚とか柿とかいちじくを植えてた。柿は台風で毎年実が落ちちゃって、葉っぱを天ぶらにして食べた。あとぶどう棚はカナブンがたくさん出て、部屋ん中まで入ってくるから大変だった。そういう植え木や植え込みは全部自分たちで植えてたね。

年代がいつばいいから。

うちの前のさ、今は図書館と青鳥学園の間の道路がさ、土だったから大変だったの。雨の日はぐちゃぐちゃになるから長靴をはかないと学校まで行けない。でもここを抜けると舗装されてたから、長靴が嫌で嫌で。舗装工事をするってなったときは、道に土管がいっぱい並べられて、端から埋められていくのを見てた。下水を通す大きな土管で遊んだりもしたね。

当時は火事が多かったから、防火水槽があらゆるところにあって、落ちて亡くなった子もいた。今、第3集会所にあるお地藏さん、あれはその子たちを偲んで建てたものなの。

うちは主人が新星中学の同級生なんだけど、坂を下ったグラウンドの方のニコイチに住んでた。今、川の公園の噴水がある辺りに「弾丸倉庫」って呼んでた甘食みたいなかたちの屋根の倉庫が4つくらい並んで、わたしそこを飛んで遊んでたから顔は知ってたんだよね。中学で部活に行ったらいて「あれ！中学生だったんだ！」って。年下だと思ってたんだよ。主人は大人になっても先輩とか友だちにずいぶん可愛がっ



ニコイチのお庭にて（写真提供：ちづちゃん）

思い出提供者

ちづちゃん（昭和23年生まれ）

世田谷郷内の平屋の都営住宅で育つ。

同時代の下馬の景色

寿司屋の見たあの頃の下馬

兵舎時代の思い出で上がるのが多種多様なお店の話。団地の側にお店を構えるお寿司屋さんの二代目から伺った、あの頃の景色の思い出。

昭和30年の11月からここで寿司屋をやってるんです。はじめは、栄通りのセブンって喫茶店まだあるでしょ？その向かいにあった白鳥さんっていうパチンコ屋さんのところ。そこがうちの最初のお店だったんです。自分で二代目ですね。小学校6年くらいには店を手伝ってました。学校から帰ってきて、まず薪割り。その頃はガスじゃなくて薪でしたから。中学に上がると忙しいときは出前に行くこともありましたね。うちは世田谷観音の辺りまで配達していたんです。

兵舎にも出前に行きました。注文してくれる方がけっこういたんですよ。建物は大きかったですよ、今でいう3階建くらいあったんじゃないですか。それで出前を持って行くと、昼間に届けても、一瞬目を塞いでばつとやらないと慣れないくらい暗いんです。小さな電球がポツポツついてるくらいでしたから。うちは夜1時までやってましたんで、子どもが寝た後に注文が入ることもけっこうありました。子どもにはかんぴょう巻きかなんか翌日に取っついてあげてたんでしょうね。握りはダメでもかんぴょう巻きは翌日まで持つからね。

あの頃は店の前の道路に出たらね、富士山が見えたんですよ。今薬局のビルが建ってる方向です。僕なんかより3つか4つ下の後輩は「としちゃん知らないの？僕なんか



この道路から東京タワーができてくのが見えてたよ」っていうんです。自分なんかはその記憶はないんですけどね。

今思い出すとね、子どもの頃は日差しっていうのが、なんかね、目がキラキラするくらい眩しいようなかんじでしたよ。今は建物がたくさん建ってるから、思い出してそう感じるんでしょうけど。なんかほんとにね「ああ朝が来た」ってかんじがしてたんですよ。子どもだから、純粹だったんですよ、きつと。

思い出提供者

としちゃん（昭和23年生まれ）

6歳のときに三軒茶屋・栄通りから下馬に引っ越す。

火事で燃え残るほど 柱が太かった 萩寮2階

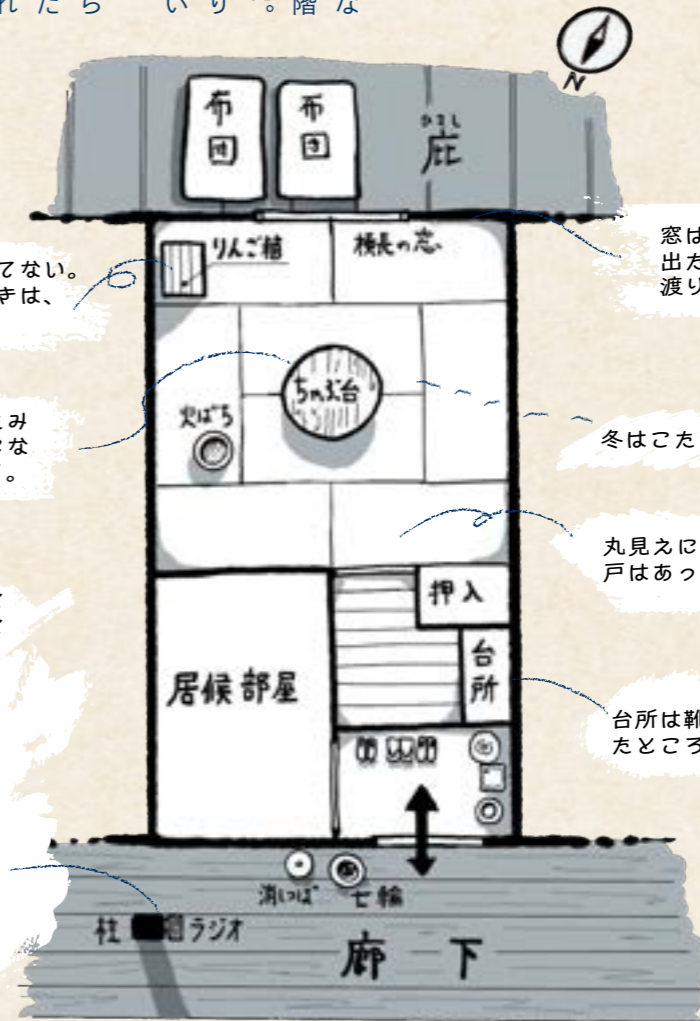
萩寮つてのはそんなに大きくなかったんだよ。うちは萩寮の2階に親父とお袋と俺と妹で住んでた。妹は10歳離れてるからあんまり一緒にいなかったな。最初はじいさんも一緒に住んでた。

4歳とか5歳までは20畳くらいの部屋を家族でつかってただけど、ある日大工が来て仕切られて半分にされちゃったんだよ。昭和20年代はどんどん引揚者が増えてったから。壁だって最初はヨシズかなにかで、最後の方はベニヤを張ってもらったけど。半分にになった部屋は6畳と4畳半くらい

だったかな。4畳半にはずっと居候が住んでたんだよな、なんか知らねえけど。だからそっちの辺りはよく覚えてねえんだよ。

萩は、昭和30年に昭和女子大の火事で燃えちまった。火事のお袋は小さい妹背負って窓から逃げて、渡り廊下の屋根から裸足で飛び降りたって。窓の外にひさしが出て、道の向こうにあった水場に行く渡り廊下の屋根とつながってたんだけど、そこだけちょっと低くなってたんだよね。それで俺の同級生のうちまで行って下駄もらって、池尻の親戚のところまで逃げたんだよ。萩にいたひとはそれでみんな散り散りになっちゃったからな。下馬を出たひとも多かった。居候も火事で出て行った。

廊下には太い柱が立ってた。その柱は火事でも完全に燃えないで残ってたくらい太い柱だったんだけど、でかいから避けて歩かなくちゃならない。だから停電すると困ったんだよ。寮でひとつのブレーカーつかってたから、どこかの家が飛ばすと全部真っ暗になっちゃう。便所に行くにも部屋の外に行かないといけないから、廊下の真ん中に柱があるとけっこうぶつかるとつがいたんだよ。その柱にラジオがくっついてた。部屋の中にラジオなんかなかったから、廊下に出ないと聞けない。印象に残っているのはNHKの『二つの歌』ちゅう番組。曲をアコーディオンで流して素人が歌う番組。うん、あんなのはよく聞いてたよ。



窓は横長。出たところがひさしになって、渡り廊下の屋根につながってた。

勉強机なんてない。宿題やるときは、りんご箱。

冬はこたつも出した。

ちゃぶ台は折りたたみのもの。べたんこになるからすぐ仕舞える。

丸見えにしないように戸はあったと思う。

太い柱が廊下にあった。そこにラジオが置いていた。

台所は靴を脱いであがったところ。

萩が燃えちゃった後、うちは蘭寮に移った。部屋づくりは大体一緒だよ。蘭は元々馬小屋だったところだから、水場が馬の水飲み用でU字型になってんだよ。そのままとお茶碗もなんも転がってっちゃうから板を渡してさ。馬を留める柱も立ってたし、物干し竿を落ちてる蹄鉄でつくったりしてたよ。蘭寮も壁は薄かったね。俺の母ちゃんが寝言をいうと、朝、隣のおばさんが「長澤さん、昨日お母さんすごい寝言言ってたね」なんて嫌なこというんだよ。全部聞かえちゃうんだよな。なんか知らねえけど、蘭に行っても居候がいたんだよな。萩のときと別のひとなんだよ。



思い出提供者

長澤さん（昭和18年生まれ）

兵舎居住年

昭和20年から31年まで萩寮で生活。火事で焼失後は講堂に一時避難し、その後蘭寮で生活。

【やってみよう】廊下から流れてくる当時のラジオ番組に耳を傾けてみよう。

同時代の下馬の景色

見習い大工の見た兵舎

多くのひとが住むことになった兵舎。住まいとしてつかわれ
にあたり様々な手が加えられたようです。当時、大工として下
馬を訪れた方から伺ったあの頃の景色。

大工仕事で兵舎に来たのは、もう
70年以上前になりますかねえ。

わたしは昭和7年の生まれで祐天
寺に住んでいたんです。この辺りは
輜重兵^{しちようへい}ついで荷物を運搬する兵
隊さんたちのいたところでね、馬が
たくさん飼われているところだった
んですよ。疎開で山形に行つて、
帰ってきたのが中学3年になるこ
ろ。戻ってきてからは恵比寿に住ん
でいました。

親が大工でしたから、中学卒業し
たらすぐ見習いを始めたんです。あ
の頃「手間請け」っていつて、工務
店だけじゃ抱えきれない仕事を我々
みたいな大工が手間で請け負ったん
ですよ。坪いくらつてかたちで。そ
れで父と母が面倒を見ていた若い衆
と一緒にあつちへこつちへと。行つ
た先のひとに「これからは大工も学
をつけなきゃいけない」っていわれ
て、それならと夜学に通いながら仕
事をしてました。戦後間もない頃で
したから、道具袋に薪を詰めて帰つ

て、それを燃料にご飯を炊いたり
いうことをしてました。

兵舎の工事はね、蛇崩川^{じゅうぶくれがわ}の上に東
京都の発注をよくやる工務店があつ
て、親父がそこ仲良かったから、
それで手伝ったんです。部屋の中に
間仕切りをつくったり、床を張った
りしましたね。中学卒業したばかり
のときだったから、昭和22年から2
3年か。16、17歳のときですよ。
見習いですからわたしは床釘を打つ
くらいでしたけどね。そのときの間
仕切りは土壁でしたね。間柱^{まはしら}ついで
うのに竹を絡ませて、そこに左官屋
さんが糞を混ぜた泥を塗っていく。
今の三宿通りに近いところに建つて
いた兵舎での仕事だったと思いま
す。

間仕切りをつくる前は広々とした
ものでしたよ。土間でね、天井もな
んにもない。そうそう、天井も張り
ました。仕切りの位置っていうのは
東京都が指定したものなんじゃない
ですかね。広さを統一につて。どん
どんつくらないとね、ひとが入りき

れませんでしたから。

周りの兵舎にはすでに住んでるひ
とたちがいましたよ。みんな子ども
をおぶつて、外で炊事していたと思
います。考えてみると、ものすごく
短い期間に、兵隊がいた場所からひ
とが住める場所に変えていったん
でしょうね。

下馬に越してきたのは50年前く
らいですかね。もう団地でしたから、
戦後の雰囲気はなんにも残っていま
せん。大工の仕事は73歳まで続け
て、その後も83歳までシルバー人
材センターで働いたんです。人間、
働けるうちに働いた方がいいです
ね。最近では地域の仕事も少しお手伝
いしているんです。

思い出提供者

池田さん(昭和7年生まれ)
祐天寺で生まれ、中学卒業後は恵比寿に住み
ながら大工の仕事が始める。現在は下馬ア
パートに暮らしている。



昭和30年代前半の世田谷郷内兵舎。出窓を増設している様子(1階)が写っている。
(引用：東京都住宅局総務部庶務課『東京都住宅年報1959』)

父が絵を描いている 姿が好きだった 梅寮2階

深川の牡丹町というところで空襲にあつて、父と母と姉とわたしでもうなんにも持たないで防空壕に逃げたの。あくる日、本当にこのくらいのカバンだけを持ってここに来たの。覚えてるのはそれだけ。私、昭和16年生まれだから、その時は4歳くらいですよ。覚えてるっていうか、後から聞かされたのかもしれないけど。それからアパートに入る前までは、ずっと梅寮の2階に住んでいたの。その後アパートに入って、そこも建て替えになつてね、70、80年ここに居るのね。

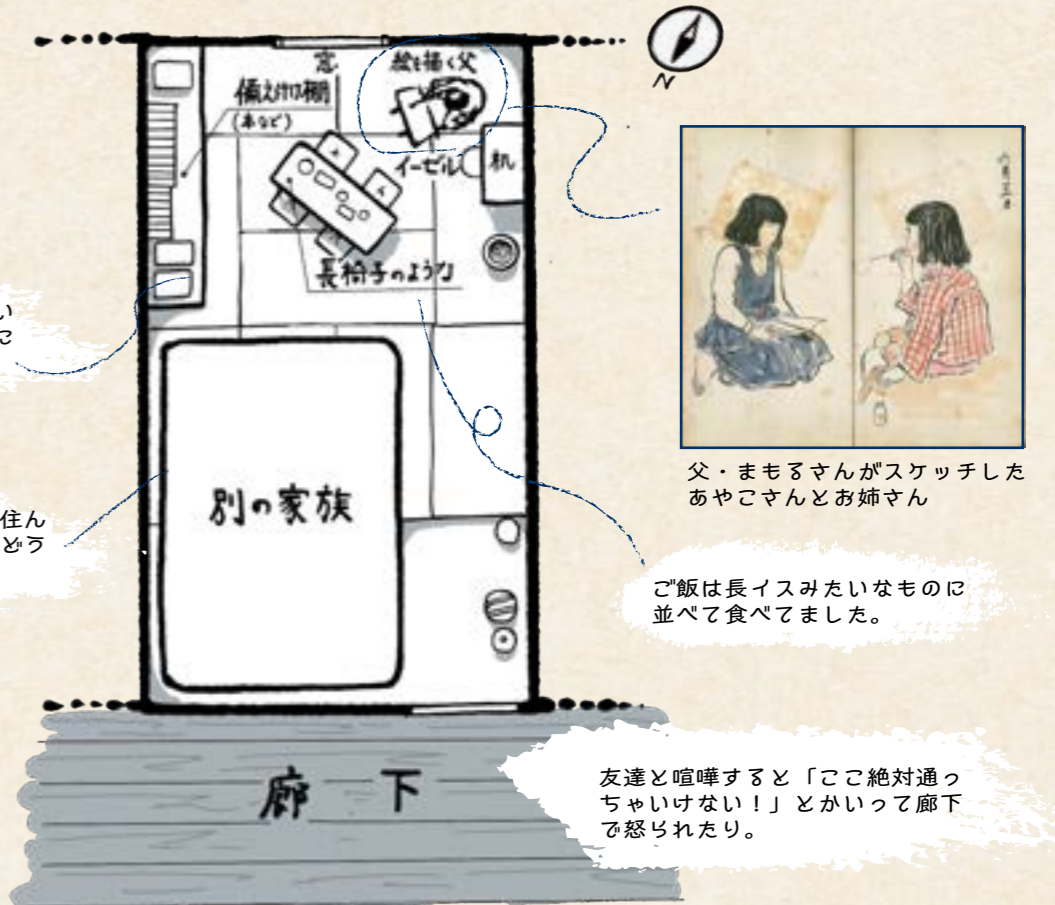
ネイバフッドセンターっていうのが

ね、今のおともだち保育園のところにあつたんです。夕方によく遊びに行つてました。勉強会とか、スクエアダンスとか教えてくれるんです。誰が来てもいいの。すごく品のいい方が園長先生かなにかやつてらっしゃつて。勉強は、わたしはあんまりしなかつたけれど、年中遊びに行つてました。すごく楽しかつたですね。

ご飯どきはみんな廊下に七輪を出して煮炊きしてましたよ。お部屋に、今でいう台所がついていなかったから。外の水場に持つて行って洗つて。できたものは、うちなんかは長椅子に並べて置いて、そこで食べたのを覚えてます。兵舎だから、部屋の壁に棚があるじゃないですか。父はそこを使いやすいようにしている置いていましたね。

うちはね、部屋の半分に別のひとたちが住んで、お部屋をふたつに分けていたんです。仕切りがあつたかは覚えてないけどうちは窓側、あちらは玄関側で。向かいの部屋があいて引越していきましてけど。よくあんなんで生活してましたよね。でもね、あの頃はここに住んで一番楽しかつた。何もなかつたけどみんな同じだったから。ものないときでも、ないはないなりに子どもながらに考えてましたね。

父は、漫画家をやっていたんです。鶴飼ももるっていつてね。独学で絵を学んで、『漫画少年』って雑誌があつて、そこに載つてたの。『安寿姫と厨子王丸』とか『良寛さま』とか。手塚治虫も載っていました。貸本屋に行くとき父の漫



画があるでしょ、わたしすつごいうれしかつたんです。部屋の中をね、仕事場にもしてました。絵の道具とか、イーゼルとか筆とかもたくさんあつて。お祭りでお火を入れる万灯(まんどろ)なんかも描いてました。あれも父が描いたんです。わたしは父が絵を描いている姿が好きだつたら、よく見ました。



父・まもるさんがスケッチしたあやこさん

思い出提供者
あやこさん(昭和16年生まれ)
兵舎居住年
昭和21年からアパートに越すまで梅寮で生活

【やってみよう】

備え付けの棚の下に座って、イーゼルの前で絵を描いているひとの姿を想像してみよう。

同時代の下馬の景色

あの頃の遊びと小学校

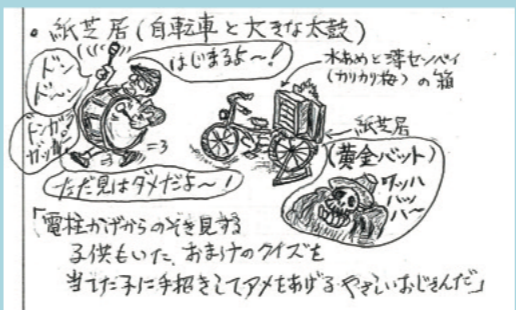
昭和20年代、兵舎の子どもたちの多くは駒繫小（松寮・竹寮など）、または中里小（梅寮・桜寮など）に通いました。世田谷郷の南側の地域に住み、駒繫小に通ったおふたりから伺った、当時の子どもたちの遊びの景色。

齊藤 俺らは昭和19年生まれで、昭和32年に駒繫小を卒業した世代。林くん家は駒繫小のすぐ近くだったんだよ。

林 そう。下馬に越してきたのは4年生のときだったんです。それまで宇都宮に疎開してて。

齊藤 俺は新潟に疎開してた。昭和22年くらいかな、3歳ぐらいのときに下馬に帰ってきて。うちは被災して半分焼夷弾で焼けた家を修理して住んだから、雨漏りがひどかったんだよ。

林 あの頃はどこの家もそうだったね。当たり前だったもんね。



齊藤さんが当時を思い出して描いたイラストの一部

齊藤 なんといつても力道山やシャープ兄弟。俺はそば屋でも見た。タダ見って訳にはいかないからちゃんと頼んで。そばより高いラーメンを頼んだときはひときわ堂々と見た。駒繫社もけっこうな遊び場だったよ。祭りもすごかったし、雪が降ったらスキーをして。

林 スキーっていつても自分たちでつくった手づくりのやつだね。竹のスキー。

齊藤 けっこう急な坂だったよな。気をつけないと、わーっと降りたら蛇崩川でしょ。水はそんなに流れてないけど、3メートル幅くらいあったと思う。

林 けっこう広い川だったよね。

齊藤 給食のき、脱脂粉乳ってあったでしょ。俺、蛇崩川に捨てたこともあった。だって臭くって、飲めなもんじゃなかったから。

林 ミルク飲めないのはけっこういたよね。僕はもらって飲んでたけど。あの頃の駒繫小は1クラス50人から55人くらいで4クラスあった。

齊藤 そう、だから教室不足で二部授業だった年もあったんだよ、何年だったか思い出せないけど。午前中に授業を受けて給食を食べて帰る早組と、家でお昼を食べて午後から授業を受ける遅組。学校が終わったら家の近くで遊んだよね。

林 みんないっしょに遊んでたよね。

齊藤 5〜6歳の小さい子から16〜17歳くらいの番長っていわれる先輩たちまで一緒だった。子ども

齊藤 広場でき、ポン菓子とか野外映画とかあったよな。布を張って『ノンちゃん雲に乗る』とか『鞍馬天狗』とかやってた。そうそう、紙芝居屋も来てた。紙芝居屋の親父が大きな太鼓叩いて「タダ見はダメだよ」っていうんだよ。だけど、最後のとんちクイズでタダ見の子が当てるとちゃんとお菓子をくれる優しい親父だった。

林 ガムの代わりに麦を噛むのもやったね。

齊藤 麦を10〜15粒口に入れて噛んでると、お餅みたいなガムもどきになってくる。その後ザラメと一緒に食べてき。当時は食糧難だったからいつも空腹だった。バスの排気ガスがいい匂いするから、追いかけてたりもしてた。

林 遊びだとベーゴマ、メンコ、馬跳び、虫狩り……。

齊藤 メンコは女優の原節子が大きくなって値段が高かったんだよ。駄菓子屋のおばちゃんに「原節子ちょうだい！」って買って買った。けど高いから、みんな小さいメンコで勝負を積み上げて、最後に原節子で勝負！みたいな感じだった。負けたら相手にもらわれちゃうんだから。

林 ベーゴマもそうだったね。弾かれると取られちゃうからロウを塗ったりしてるのもいた。あとプロレス中継。毎週金曜にテレビがある友だちの家に集まって見てましたね。



の世界もなんだかんだといって縦社会だったけど、でも子ども同士ってのはさ、たわいないじゃん。

林 ぼくらはふたりともその後下馬を出て、今は違う土地で暮らしている。そうだね、だから、下馬といえば子どもの頃の思い出のあるまちですね。

思い出提供者

林 ひできさん（昭和19年生まれ）
小学校4年生のときに疎開先の宇都宮から下馬に引っ越し、駒繫小学校に入学。現在は東村山市在住。

齊藤 やすのりさん（昭和19年生まれ）

3歳頃に疎開先の新潟から下馬に帰ってくる。林さんとは駒繫小学校の同級生。現在は調布市在住。子どもの頃から絵を描くのが好きだった。

戦前の下馬の景色

城壁、軍馬、連隊祭り

兵舎が住まいとしてつかわれる前の下馬・

三軒茶屋は軍隊のまち。

兵隊がいる風景の中で育った方から伺った

世田谷郷「以前」の下馬の思い出。

下馬の一丁目だね、もう90年暮らしていません。父が土地を買って建てた家なんです。なんとか空襲でも焼け残って。小学校は駒繫小です。わたしね、駒繫の1期生なんです。わたしが小学校上がるときにできたの。だから学校は家からとっても近かったんですよ。

兵舎はね、それこそ城壁みたいな高い塀があって、護衛の兵隊さんが銃を持って立ってました。祖母が二子玉川にいたので玉電で行って、帰りは三軒茶屋から連隊の横を歩いて帰ったんです。弘善湯さんのあたりからずっと高い塀。4年生のとき疎開に出たから、疎開に行く前ですね。だけど6年生で疎開から帰ってきたときもまだ塀はありました

ツを貸してあげると井戸で汲んで、馬に飲ませてました。連隊がどこから来たかなんてことはわからないんですけど。まだ三宿通りも途中までしかなかったし、車なんてまだ全然走っていませんでしたね。

兵舎の中にはね、連隊祭りが入ったことがあります。お友だちのお父さんが軍隊で上の方のひとだったみたいで、そのひとが「連隊祭りに行く」とって誘ってくれたのでくっついて行っただけです。子どもながらにすごく広くなってね。出店なんかが出てたかなあ、兵隊さんがなにかしてたのかもしれないけど、全然覚えてないの。ただ、楽しかったってことは覚えてる。友だちのお父さんがたまたま連れていってくれただけだから、そんな何回もありませんでしたけどね。

中学は昭和女子に行ったんです。わたしたちはね、6・3・3制になったその年なのよ。学校制度がまだ確実にできていないときだったから、この地域の子はここへ行くっていうのがなくて、「委託生」っていうので、無試験みたいなものが入れました。勉強の好きな祖母が「近いからここがいい」とって決めたの。あのときは昭和女子も兵舎を教室に使ってたの。広い部屋でしたよ。南京虫が出るんですよ、兵隊が長いこと住んでたからね。窓も、ガラスじゃなくて障子だったね。とにかく



世田谷公園のところは駒沢練兵場だったでしょ、あれは馬の練習場っていうかね。家の前の通りで友だちとままごしてると、パカパカパカパカって馬の蹄の音が聞こえるのよ。そうすると慌てて片付けてうちに帰るんです。「馬ー!」「来たー!」って大慌てで。すごい連隊を組んでくるんですよ。それで、その辺で休んでると兵隊さんが「水をくれ」というわけです、馬に飲ませるのに。バケ

く厳しい学校でね、砂利の上にひぎをついて定規をもった先生がスカートの丈を測るんです。登下校も厳しくって、246側の正門のほかは出入りしちやいけない。だから大回りして通ってたんです。

昭和女子大の火事は、ちょうど妹が卒業のときだったんです。妹は記念品もなにも全部燃えてなくなっちゃいました。昭和30年、号外が配られるくらいすごい火事だった。

もう本当にね、わたしたちは戦争をよく知っちゃっていますからね。もう戦争は嫌だって、孫にね、絶対に戦争は嫌だって、そういつてるんです。

思い出提供先

K・Oさん（昭和9年生まれ）

1歳から現在の場所で暮らす。駒繫小学校の1期生。小学6年生のときに疎開先で終戦を迎え、中学は昭和中学校（現在の昭和女子大が設置）に通った。

思い出の景色に関わる下馬の様々な出来事

- 明治30(1897) 駒沢練兵場が造営される
(現在の区立世田谷公園、自衛隊中央病院辺り)
- 明治31年 「近衛野砲兵連隊」が移転してくる
(現在の昭和女子大、区立三宿中学校辺り)
- (1898) 「野砲兵第一連隊」が移転してくる
(現在の下馬アパート西部辺り)
- 明治40年 玉川電車(玉電)の開通
(1907)
- 明治末? 「野戦重砲兵第八連隊」が設置される
(現在の下馬アパート東部辺り)
- 昭和5年 東京府昭和尋常小学校が開校する
(1930) (現在の区立中里小学校)
- 昭和15年 東京市駒繫小学校開校が開校する
(1940) (現在の区立駒繫小学校)
- 昭和20年 世田谷を含む山の手地域の大規模空襲(5月)
(1945) 太平洋戦争、終戦。このとき全国で420万戸の住宅が不足していたといわれる(8月)
米軍、東京進駐開始(9月)
兵舎への戦災者の入居が開始。戦災復興町会が発足(10月)
あけぼの保育園(後の鳩ぼつぼの家保育園)、旧兵舎を利用して開園(11月)
日本女子高等学院(現在の昭和女子大学)、中野区から近衛野砲兵連隊跡地へ移転(11月)
- 昭和21年 昭和天皇、東京御巡幸において世田谷郷を訪問
(1946) (2~3月)

- 昭和22年 「6・3・3」制施行。国民学校は小学校に改称され、新制中学校が発足していく
(1947)
- 昭和23年 区立新星中学校が開校する
(1948) この頃より旧兵舎の間に平屋の都営住宅(通称ニコイチ)が順次建設されていく
- 昭和24年 アメリカ・フレンズ奉仕団、旧兵舎を利用し「おともたち保育園」を開園(6月)
(1949)
- 昭和26年 おともたち保育園敷地内に「世田谷ネイバフッド・センター」開設
(1951)
- 昭和30年 昭和女子大の大火事。隣接していた萩寮等が焼失。この時点で戦後都内最大の火災といわれた(3月)
(1955)
- 昭和33年 鉄筋コンクリート造の「下馬アパート」への建て替えが開始。年度内に1・2号棟が完成する
(1958)
- 昭和39年 東京オリンピック開催
(1964)
- 昭和48年 区立こどものひろば公園が開園
(1973)
- 昭和55年 区立下馬図書館の開設
(1980)

※参考文献は奥付に記載

おわりに

いま、みなさんの周りにはどんな景色が広がっていますか？
兵舎から建て替えられた鉄筋コンクリートの下馬アパートは、高層団地へと再び建て替えが進められています。日常の景色や見慣れたまちなみもいつか大きく変わって「思い出の中の景色」になっていくかもしれません。
思い出の中の景色をひとに伝えるというのは簡単なことではありません。同じ景色を見られない以上、不可能かもしれない、とも思います。それでも工夫して伝えようとして、知ろう／聞こうと試行錯誤をする中で、あちらからこちらへ(ひよつとすると思っていないようなかたちで)なにかがつかっていく可能性はあるのだと思います。

ときには足を止めて、身近なひとや自分自身の思い出の景色に思いを馳せたり、いつか思い出になる「いま」を見つめたり、そのことをひとに伝えたりしてみませんか？

阿部健一

下馬の兵舎時代の思い出を巡る歩みは、下馬団地に住むある方の「昔ここは兵舎だったの」ということばから始まりました。
世田谷パブリックシアターは東京・三軒茶屋にある劇場で、演劇・ダンス作品の創作・上演だけではなく、地域の方々と演劇(表現)を活用し、考え方や背景が違うひとたちが対話を通じて知り合うことで、共に暮らし認め合う関係を築く取り組みを行う学芸というセクションがあります。

2021年、世田谷パブリックシアター学芸は高齢者を中心に多世代が集う場をつくりたいと考えていた下馬2丁目北町会や下馬地区の地域包括ケアセンターと協働し『だれでも表現クラブ・極楽』を行っていました。その中で出会った方からお聞きしたのが、かつて兵舎だった頃の下馬の「思い出」でした。同時に、戦後、都営アパートへと姿を変える中で、地域の景色も様変わりし、当時を知る世代が少なくなっていることも知りました。演劇(表現)には、ひとびとの物語を伝え／受けとりやすいかたちにする役割があります。表現というかたちでかつての下馬の様子を残し、今ここに暮らすひとびとに伝えたいと考えたわたしたちは、「まち」を舞台とした演劇活動をされているアーティストの阿部健一さんと「下馬兵舎時代の思い出」を巡る歩みを進めることにしました。

これまで、兵舎時代を知る方々から少しずつお話を伺い、2021年と2023年には2つの『下馬兵舎時代の思い出の絵地図』を、今年には「当時の兵舎の部屋」の再現とこの冊子をつくることができました。ここまでの歩みの中で「思い出を聞かせてほしい」と訪れたわたしたちを受け入れ、たくさん時間をかけて伝えてくださったみなさまに改めて感謝を申し上げます。当時を知る方々の「思い出」を出発点に、誰かに伝えること／誰かを知ること新たな対話や関係が生まれたように思います。そして、かつてここに暮らしていたひとびとの暮らしが、今ここに暮らすひとびとの生活をかたちづくり、これからの日々へとつながっていることを強く感じることができました。

これからもこの「思い出」を巡る歩みを地域のみなさまと進めていけたら幸いです。

世田谷パブリックシアター学芸



<主な参考文献>

- ・東京都世田谷区『世田谷近・現代史』1976年
- ・世田谷区生活文化部文化・交流課『ふるさと世田谷を語る 上馬・下馬・野沢・三軒茶屋・駒沢1～2』1994年
- ・世田谷区立郷土資料館『平成19年度特別展 1945-1954 写真で見る戦後復興期の世田谷』2007年
- ・世田谷区立郷土資料館『平成29年度特別展 地図でみる世田谷』2017年
- ・東京都住宅局総務部庶務課『東京都住宅年報1959』1960年
- ・東京消防庁警防部警防課「東京都外地引揚者定着寮世田谷郷火災の詳細」1956年、『防災』（48）東京連合防災協会
- ・西山知三『日本のすまい（巻）増補』1987年、勁草書房
- ・『アサヒグラフ』1945年12月5日、朝日新聞社
- ・後藤美緒、松下優一、塚田修一「旧軍用地に住むということ―世田谷郷と戸山ハイツを事例として―」2023年、『中央大学文学部紀要社会学・社会情報学』第33号
- ・大高真紀子、定行まり子「ネイバフッド・センターに関する考察 ―昭和20年代の東京の児童館に関する一考察―」2004年、『生活学論叢』9巻
- ・朝日新聞 1953年2月17日、1955年11月14日、1958年8月8日
- ・読売新聞 1955年3月1日、1960年6月13日夕刊
- ・世田谷区立中里小学校 WEB サイト（最終閲覧：2024年11月27日）
- ・世田谷区立駒繫小学校 WEB サイト（最終閲覧：2024年11月27日）
- ・社会福祉法人杉の子保育園 WEB サイト（最終閲覧：2024年11月27日）
- ・学校法人昭和女子大学 WEB サイト（最終閲覧：2024年12月6日）

下馬兵舎時代の思い出の景色 BOOK'24

～兵舎の部屋のとある間取りから～

進行・編集・文 阿部健一

空間設計・イラスト 鈴木健介

デザイン 齋藤優衣

リサーチ 小林遼

コーディネート 塩原由香理（世田谷パブリックシアター学芸）

協力 昔の下馬を知るみなさま、下馬あんしんすこやかセンター（地域包括ケアセンター）、岡田陽子、池村爽

発行 世田谷パブリックシアター

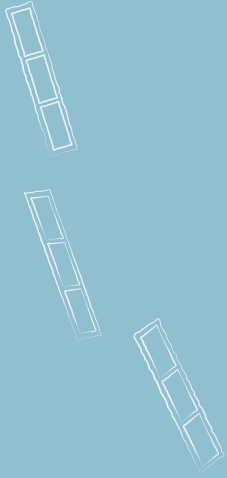
発行日 2024年12月14日

印刷 株式会社グラフィック

問い合わせ 世田谷パブリックシアター 学芸

TEL：03-5432-1526 FAX：03-5432-1559

※この冊子は、2024年12月14日（土）に開催した「極楽フェス'24」で作成したものです。



極楽
フェス'24